

# さいたま 川柳



ギンリョウソウ

令和4年 (2022年)  
6月号 (No.751)

日川協加盟

## 巻頭言

### 再生再考と「思い出」

巣籠もり生活が長引き、テレビで色々な記録や映画を観る機会が得られ、録画によって何時でも再生できる時間も増えた。思えば近年、映画館に足を運ぶ機会がなくなった。上映は全員入れ替え制だから、中座するとその場面が途絶することになってしまう。映画少年だった頃は、二本立てや三本立てで入替なしの映画館で、洋画を繰り返し観ながら、英語の勉強をしていたものだった。しかし今や、テレビ録画は観たい箇所を幾度でも再生できるから便利だ。

洋画「天国と地獄」のビデオを鑑賞した。二度目である。その中で、バチカンの役職者が「宗教には欠点もある。それは人間に欠点があるからだ」と語る字幕に釘付けになった。ロシアによるウクライナ侵攻に、ロシア正教の在りようが問われている。歴史への思いが重なる。

再生とは反復であり再考の刻である。慌ただしいIT進化の時代に、考える刻を認識することは有益である。矢のように流れる刻を、ただ漫然と眺めている老境では能がない。あり余る仙郷の時間を与えてくれたのは、天与の刺激かも知れない。

生き方という修練も反復である。老いて得られる再生再考の機会を意義深いものに出るか否か、日々考えることになりそうだった。

## 願法 みつる

### 終刊に向けて「思い出の記」(再掲)

さいたま誌発刊も残り半年余と迫りました。現会員やかっつのお仲間、永くご厚誼を賜っている方々から、お言葉を頂ければ幸いです。個人のお名前前で、それぞれの思いを述べて頂きたいと念じます。「吟社への思い出、終刊への思い、誰某さんの思い出、川柳への思い、あの日のあの時の思い出」など、タイトルも内容もご随意です。

記事は、二十五字×四十行(一千字基準)。記載用紙は自由。誌一頁分に構成します。玉稿は編集部に到着以降、最終の十二月号にかけて、逐次紹介させて頂きます。皆様の多様な「思い出の記」にお目に掛かりたいものです。

送付先は投句類と一緒に場合は事務局宛に、代表宛の場合は表紙4の発行人宛で願います。メールによる原稿送付でも結構です。

sanhoh-mt@nifty.com

編集部